

第 13+14 回資料

ルルという名の欲望

ルルとは何者か？

主要登場人物の音列はいずれもただひとつの例外を除いて、一定の手順によって基本音列を並べ替えたものである。したがって彼らの氏素性は、すくなくとも音楽構造的には疑いようのないものになっている。まったく原形をとどめないほど変形されていても、彼らの起源は基本音列にある。彼らの身元は音楽上、保証されてもいるということだ。

ところが、ルルの音列だけは、基本音列から直接導き出されたものではない。第一幕冒頭、12 の音が順番に 3 つずつ縦に散りばめられた肖像画の場面の 4 つの和音から生まれている。たしかにそれらの和音も基本音列に基づいてはいる。しかしルルの音列の直接の起源は肖像画の和音である。つまりオペラの物語のレベルでは、ルルの起源は肖像画に描かれたルル自身ということになる。そのためにルルははじめからルル自身を演じることになる。

世間のひとがわたしのことをそうみなしてきたものとはちがう何者かとして見られた
いと思ったことなんて、わたしは一度としてなかったし、いまのこのわたしとはちが
う何者かとして世間のひとがわたしのことをみなしたこともまたなかった。

他者の欲望が投影される鏡

人々はルルのなかにそれぞれの欲望の価値を見いだしている。ルルはその彼らの欲望のままに、「ルル」にも「ネリー」にも「ミニヨン」にも「エーファ」にもなる。つまり、

ルルが彼らの欲望を糧に生きているのではない。

彼らが（ルルに投影する）みずからの欲望を糧に生きているのである。

あの娘は愛によって生きていくことなんてできないんだ。なにせあの娘の人生そのものが愛なのだから。

ルルはそのような欲望の対象であるかぎり、「ルル」や「ネリー」や「ミニヨン」や「エーファ」の名のもとにみずからを「愛」として主体化する。しかし第三幕第二場で娼婦となったルルは、ついにみずからを「愛」という名の商品として主体化することで、それを糧に生きていかなければならない。

ルルは人々の「愛」の対価として彼らに価値をもたらすことはできても、対価を得るためにみずから消費されるべき（使用）価値として提供することはできなかった。そのことがよくわかっているシェーン博士は、ルルとの結婚によって彼女を所有することでみずからの欲望を糧に生きるかわりに、ルルを他の男たちと結婚させることでその男たちの欲望を糧に生きることを選択する。彼の「愛」はもちろん、倒錯的（＝変態的）にならざるを得ない。彼は**いわば、ルルに対して商品を使用するために買う消費者ではなく、それをさらに高く売るために買う資本家のようにふるまう**。ルルとは彼にとって資本以外のなにものでもない。ただし「ミニヨン」としてのルルは、彼にとってまたみずからの欲望の価値が見いだされる対象であることもまた事実である。その矛盾をルルに突きつけられて、シェーン博士もまた結局は彼女と結婚せざるを得なくなる。そしてそれは最悪の結果しか生まない。資本を商品としてみずから所有し消費するような資本家は、破産するほかないからである。シェーン博士はルルに自殺を強要するが、逆に彼女に射殺されてしまう。

かつて5万マルクの値のついたルルの肖像画は、ロンドンの質屋で12シリングの買値しかつかない。その切り取られ痛んだ絵のなかのみずからを、ルルは相変わらず演じる。ただしここでのルルの役回りはもはや価値を生む資本としての貨幣ではなく、もっぱら消費されるだけの商品である。医事顧問官、画家がそれぞれ「教授」、「黒人」として娼婦ルルを訪れ、最後に「切り裂きジャック」として登場するシェーン博士がルルという名の「愛」の息の根を止める。

資本家の幻想

貨幣-商品-貨幣の循環において貨幣と商品はいずれも価値自体の異なる存在様態として、つまり貨幣はその一般的様態として、商品はその特別な、いわば単に変装した様態として機能しているのである。価値はたえず一方の形態から他方の形態へと移行し、この運動のなかで失われることはない。こうして価値は自動的^{オートマチック}な主体へと転化される。自己増殖する価値がその生涯にわたる循環のなかで交互にとる特別な現象形態をそれぞれじっくり見てみれば、資本は貨幣であり、資本は商品であるという二つの声明に行き着くことになる。しかし実際は、価値はここで、あるプロセスの主体になる。そのプロセスにおいて価値は貨幣と商品という二つの形態をたえず交互に取り替えながら、量自体を変化させ、元の価値としての自己から剰余価値としての自己を突き放し、自己増殖を遂げる。なぜなら価値が剰余価値を付加するその運動は価値自体の運動であり、価値の

増殖、つまりは自己増殖だからである。価値は価値なので価値を付加するという神秘的な性質を価値は身につけたのである。(マルクス『資本論』第一巻「貨幣の資本への転化」)

シェーンにとってルル=資本としての貨幣

ルルとシェーンの関係：ルルが12歳のときからシェーンは彼女を囲うようになる。どうやらそのことが彼の妻の死と関係してもいるらしい。シェーン自身は妻の死後、だれとも再婚しない。その一方、ルルを他の求愛者たちにあてがい、その間ずっとルルとの関係を密かに続けている。

なぜか。シェーンはルルを妻とすることで、自らの欲求を満足させる(「商品-貨幣-商品」の循環)代わりに、他の男たちをルルと結婚させ、彼女に対する男たちの欲求を満足させる(貨幣-商品-貨幣)の循環)ことによって、ルルへの愛=欲望を掻き立てる。欲望の対象-原因としての愛はそれによってよりいっそう強度を増すというのが資本家シェーンの幻想である。シェーンにとって、ルルは魅力をたえず増殖させてゆく女でなければならない。

シェーン博士の幻想

ただし、幻想の構図はきわめて論理的である。証券取引所に定期的に通う投資家シェーンにとって、ルルの求愛者たちは(資本としての)商品であり、ルルは(資本としての)貨幣でもあると仮定してみよう。つまり、シェーンは、他の求愛者たちにとってのルルと自分にとってのルルを「交互に取り換えながら」循環させることで、ルルという名の愛の対象を増殖させるとしたら……。結婚は彼にとって「貨幣-商品-貨幣」の循環ではなく、「商品-貨幣-商品」という単純な循環でしかないからである。(貨幣ルルはそこでは資本ルルへと転化されることなく、最終的にシェーン夫人という使用価値として消費され、愛という価値は失われるだろう！)

「あの娘は愛によって生きていくことなんてできないんだ。なにせあの娘の生そのものが愛なのだから」(シゴルヒの台詞)

このように見れば、マルクスの貨幣の資本への転化についての記述は、以下のようにシェーンの恋愛形態として読み替えることができる。

$x = \text{貨幣} \rightarrow \text{シェーンにとってのルル}$

$y = \text{商品} \rightarrow (\text{シェーン以外の}) \text{求愛者たちにとってのルル}$

$x+y = \text{資本} \rightarrow \text{ルル}$

$a = \text{価値 (剰余価値、利子)} \rightarrow \text{愛}$

シェーンにとってのルル-求愛者たちにとってのルル-シェーンにとってのルルの循環においてシェーンにとってのルルと求愛者たちにとってのルルはいずれも愛自体の異なる存在様態として、つまりシェーンにとってのルルはその一般的様態として、求愛者たちにとってのルルはその特別な、いわば単に変装した様態として機能しているのである。愛はたえず一方の形態から他方の形態へと移行し、この運動のなかで失われることはない。こうして愛は自動的^{オートマチック}な主体へと転化される。自己増殖する愛がその生涯にわたる循環のなかで交互にとる特別な現象形態をそれぞれじっくり見てみれば、ルルはシェーンにとってのルルであり、ルルは求愛者たちにとってのルルであるという二つの声明に行き着くことになる。しかし実際は、愛はここで、あるプロセスの主体になる。そのプロセスにおいて愛はシェーンにとってのルルと求愛者たちにとってのルルという二つの形態をたえず交互に取り替えながら、量自体を変化させ、元の愛としての自己から剰余愛としての自己を突き放し、自己増殖を遂げる。なぜなら愛が剰余愛を付加するその運動は愛自体の運動であり、愛の増殖、つまりは自己増殖だからである。愛は愛なので愛を付加するという神秘的な性質を愛は身につけたのである。

シェーンのもくろみの破たん

第一幕第三場：ある晩、シェーンが婚約者の女性を連れてルルが踊る舞台を見にやってきたことが、ルルを逆上させてしまう。婚約者との結婚にいつまでたっても踏み切れない真意を見透かされたシェーンは、ルルにやむなく婚約破棄の手紙を婚約者宛てに口述筆記させられたあげく、ついにルルと結婚せざるを得なくなる。

第二幕第一場：結婚しても、相変わらずルルはシェーンの息子アルヴァ、レズビアン^{レズビアン}のゲシュヴィッツなどさまざまな求愛者たちと自由奔放に関係をもつ。しかしルルの夫としてのシェーンにとって、ルルはもはや愛という価値を増殖させる貨幣ルルではなく、もっぱらみずからの欲求を満たすための消費価値ルルでなければならない。この資本家気取りのシェーンは結婚とともに、ブルジョワ的倫理観をふりかざしながら、商品購入者の権利を訴えるスノッブの素顔（＝小市民根性）を晒す。ピストルをルルに手渡し、自殺を強要するシェーンは、逆にルルによって射殺されてしまう。

新聞社の編集主幹という社会的な地位に見合った体裁だけは取り繕うため、結婚する気などないが、それ相応の女性と婚約だけはしておく必要がある。ただし愛の増殖に結婚という制度（「商品-貨幣-商品」の循環）はなじまない。

ルルに「ブルジョワ社会の概念など期待できない」ことを知りながら、意に反して「シェーンにとってのルル」ではなくシェーン夫人の役割を彼女に与えてしまったことでシェーンのもくろみは破たんする。もちろん、ルルは結婚生活において守らなければならないブルジョワ社会の通念などそもそも持ち合わせていないし、それを共有しなければならない理由もルルにはない。

「シェーンにとってのルル」＝ミニヨン

「画家にとってのルル」＝エヴァ

「医事顧問官にとってのルル」＝ネリー

「シゴルヒにとってのルル」＝ルル

「ルルにとってのルル」＝肖像画のルル、あるいは鏡像のルル

* 「鏡のなかのわたしを見たとき、わたしはなれるものなら男になりたいと思ったの
……、わたしの夫にね」

ルルの幻想

$x =$ シェーンにとってのルル→ルルにとってのルル

$y =$ (シェーン以外の) 求愛者たちにとってのルル→シェーンにとってのルル

$x+y =$ ルル→すべての求愛者たちにとってのルル

$a =$ 愛→(愛の主体としての) ルル

ルルにとってのルル-シェーンにとってのルル-ルルにとってのルルの循環においてルルにとってのルルとシェーンにとってのルルはいずれもルル自体の異なる存在様態として、つまりルルにとってのルルはその一般的様態として、シェーンにとってのルルはその特別な、いわば単に変装した様態として機能しているのである。ルルはたえず一方の形態から他方の形態へと移行し、この運動のなかで失われることはない。こうしてルルは自動的^{オートマチック}な主体へと転化される。自己増殖するルルがその生涯にわたる循環のなかで交互にとる特別な現象形態をそれぞれじっくり見てみれば、すべての求愛者たちにとってのルルはルルにとってのルルであり、すべての求愛者たちにとってのルルはシェーンにとってのルルであるという二つの声明に行き着くことになる。しかし実際は、ルルはここで、あるプロセスの主体になる。そのプロセスにおいてルルはルルにとってのルルとシェーンにとってのルルという二つの形態をたえず交互に取り替えながら、量自体を変化させ、元のルルとしての自己から剰余ルルとしての自己を突き放し、自己増殖を遂げる。なぜならルルが剰余ルルを付加するその運動はルル自体の運動であり、ルルの増

殖、つまりは自己増殖だからである。ルルはルルなのでルルを付加するという神秘的な性質をルルは身につけたのである。

** 「価値があるときは貨幣形態を脱ぎ捨て商品形態を取り、あるときは商品形態を脱ぎ捨て貨幣形態を取りながら、この交替のなかで自己を保持し拡張していくこうしたプロセスの横断的な主体として、価値はとくに単独の形態を必要としており、それによってまた価値はその自己同一性^{アイデンティティ}を確立することになる。そしてこのような形態を価値はもっぱら貨幣という形で得る。」（マルクス『資本論』第一巻「貨幣の資本への転化」）

*** 「その（資本としての）貨幣は、循環することを通じて、より多くの価値を生み出す価値、自己自身を媒介-措定する価値、それ自身の前提を遡及的に措定する価値である。」（ジジェク（山本耕一訳）『パララックス・ビュー』作品社、2010年）

価値が「貨幣-商品-貨幣」の循環において遡及的に措定されるように、ルルもまた「ルルにとってのルル-シェーンにとってのルル-ルルにとってのルル」の循環によって、遡及的に見いだされるのだとしたら……。つまり、ルルの一般的な様態である「ルルにとってのルル」、あるいは鏡の中のルル、肖像画のルルが、ルルのそれぞれ特別な様態である「シェーンにとってのルル」、「画家にとってのルル」、「アルヴァにとってのルル」、「ゲシュヴィッツにとってのルル」、「シゴルヒにとってのルル」などと交互に入れ替わるその不断の交替のなかで、ルル自体がこの永^{ペルペトゥウム}久^{・モビレ}機関の不可視の主体として遡及的に産出されるのだとしたら。

**** ^{オートマチック}自動的な主体としての価値が価値を付け加える自己増殖の運動は、「資本家の“無意識の幻想”であって、この“幻想”は、“実体を欠いた純粋な主体性”としてのプロレタリアートに寄生している」が、「現実には、資本は、自己を生みだしたりせずに、労働者の剰余価値を搾取する。」（ジジェク、同上書）

アルバン・ベルクの幻想

x = 貨幣→ルルの音列

y = 商品→（シェーンを含む）求愛者たちの各音列

x+y = 資本→すべての音列

$a = \text{価値} \rightarrow \text{基本音列}$

ルルの音列-求愛者たちの各音列-ルルの音列の循環においてルルの音列と求愛者たちの各音列はいずれも基本音列自体の異なる存在様態として、つまりルルの音列はその一般的様態として、求愛者たちの各音列はその特別な、いわば単に変装した様態として機能しているのである。基本音列はたえず一方の形態から他方の形態へと移行し、この運動のなかで失われることはない。こうして基本音列は自動的^{オートマチック}な主体へと転化される。自己増殖する基本音列がその生涯にわたる循環のなかで交互にとる特別な現象形態をそれぞれじっくり見てみれば、すべての音列はルルの音列であり、すべての音列は求愛者たちの各音列であるという二つの声明に行き着くことになる。しかし実際は、基本音列はここで、あるプロセスの主体になる。そのプロセスにおいて基本音列はルルの音列と求愛者たちの各音列という二つの形態をたえず交互に取り替えながら、量自体を変化させ、元の基本音列としての自己から剰余基本音列としての自己を突き放し、自己増殖を遂げる。なぜなら基本音列が剰余基本音列を付加するその運動は基本音列自体の運動であり、基本音列の増殖、つまりは自己増殖だからである。

消える媒介者＝肖像画の和音

ルルの音列がその「幻想上の支え」としている肖像画の和音は基本音列の自己増殖のプロセスのなかで失われてしまう。つまり、ルルの音列の起源である 4 つの三和音は、それが基本音列とルルの音列とのあいだをいったん媒介するや、両者のなかに解消され、姿を消す、束の間の仮晶である。もちろんルルの音列はそれとともにその抛りどころを失う。したがって、肖像画の和音はルルの音列が「ルルの音列-求愛者たちの各音列-ルルの音列」の循環のなかで、みずからを媒介しながら、その起源を遡及的に措定しなければならない失われた幻想の対象となる。